

デジタル印刷生産システムで経営改革

商圈5キロ以内、来店型、少数精鋭を追及

創業から66年の有限会社近森謄写堂（近森恵美社長）は、データ加工と冊子印刷製本の両輪で成長している。それまでの軽オフセット印刷機から2016年にコニカミノルタbizhubPress1250Pを導入し、2年後にはコニカミノルタbizhubPress1250を増設。小ロット・多品種・短納期のさらなる生産効率を高めた。同社におけるデジタル印刷機の導入は商圈を半径5キロ圏内に絞った印刷サービス、工程短縮、少数精鋭化という三つの効果を生み出している。



近森恵美社長(右)と近森純一郎専務

データ加工と冊子製本の生産改革

1953年に「近森謄写堂」として創業した同社は、ガリ版からタイプ、軽オフセット、POD印刷へと変革してきた。「本作りが近森の原点。お客様が喜んでくださる本を作ることが近森の仕事」と語る二代目の近森恵美社長は冊子製本を基本に



本社横の工場

「印刷のサービス化」を推進してきた。

蓄積してきた近森謄写堂の伝統をさらに発展させているのが近森純一郎専務だ。近森専務は創業者である祖父からの三代目で34歳。地元の小中高から松山大学卒業後に近森謄写堂に入社した。幼少期から祖父の印刷に対する情熱を見てきた根っからの印刷人であり、印刷会社の経営の厳しさを祖父と母親の社長から学んだ。

転換期となったのが2016年にデータ作成、加工、POD出力、冊子の印刷、製本までの生産ラインを本社横に新設した工場だった。



データ制作、加工部門

データ加工から三菱製紙のCTP TDP-459、モノクロPODのコニカミノルタbizhubPress1250P、bizhubPress1250、インクジェットカラープリンターのオルフィスEX7200、カラーオンデマンド機のキヤノンImagePressC7000、製本機のホリゾン10段ペラ丁合機VAC1000m、VAC1000C、無線綴機BQ-470、勝田断裁機KC66までデータから印刷、製本の一貫生産ラインを作った。

従来は軽オフ機を2台使っていたが、PODの導入後は軽オフ機の使用機会が少なくなった。A3軽オフ機は封筒や伝票



理想科学のオルフィスEX7200

をこなし、冊子製本はデータの製作・加工からPOD、製本まで一貫生産システムへ全面的に切り替えた。

近森専務は「PODに移行してからは生産効率が大きく改善しました。繁忙期も2台のPOD機で乗り切りました。夜中でも無人で出力できるので軽オフ機に較べると生産性ははるかに良くなりました。小ロットが多い当社にぴったりで、様々なオーダーにもスピーディーに対応できるようになりました」と語る。

同社を長年にわたってサポートしている機材商社の一誠社・藤田誠一取締役は「大変賢明な決断をされ、結果的に変化を先取りされました。無理をしないで徐々にPOD化を進めて新しいものづくりシステムを確立されている。新しいことにチャレンジする経営姿勢が素晴らしい」と述べる。

印刷サービスの変化を先取り

近森専務は「お客様はどんどん変化しています。近森謄写堂が変化に対応した“印刷サービス”を提供できるようになったのは、デジタル印刷を中心とした生産システムに転換したからです。小ロット化がさらに進み、印刷から製本まで自社で提供するというこれまで培ってきた近森謄写堂のサービスがデジタル印刷の導入により、さらに進化しました」と変革の背景を述べる。

近森謄写堂は自社の特色を「商圏の狭さ、来店型、PODの導入、自社で出来ない案件は全て外注にお願いして、自社は



コニカミノルタのbizhubPress1250



ホリゾン丁合機1000C、1000m

少数精鋭化しています」と説明する。自社の特色を生かして得意分野に特化するという経営戦略は同業者間の交流から影響を受けた。「自社で無理してやろうとは思いません。機械を設備するよりも頼んだ方が結果的に安くなります。その道のプロに頼めば効率が良い。また、その分いろんな方が仕事が出来ます」と説明する。

近森専務は「本作りはデータ制作が絶えず変化し、お客様の要望も変わってきます。データ処理、データ作成、データ加工からPOD出力、そして製本・加工に至る工程をいかに短縮するか、少数精



ホリゾン無線綴機BQ470

鋭化するかが課題です。当社はオンデマンドのオペレーターも製本作業を行います」と社員のマルチ化・多機能化を推進する中で「少数精鋭様々なジャンルで活動できる会社になりたい。例えば印刷と動画の連携についても探り、多メディア化にも対応していきたい」と今後の展望を語っている。

有限会社近森謄写堂
高知県高知市本町5-5-18
TEL 088-875-2215
www.chikamori.jp